VOL.40 2018.4
平成30年4月発行

東京奥能登応援団だより

東京奥能登応援団事務局
〒102-0093 千代田区平河町2-6-3
都道府県会館14階　石川県人会内
TEL:090-8876-4901

「奥能登連合観隊構想」で誘客の促進を

能登空港ターミナルビル㈱　代表取締役専務　中本利光

能登空港は、開港して15年が経とうとしています。皆様方には関東と故郷を往来する際に能登空港をご利用頂いていることに深く感謝申し上げます。また、奥能登に住まわれている方々からは『我が家から金沢市の中心部へは自動車で2(～3)時間かかるが、飛行機を使えば同じ時間で東京の都心に疲れずに行くことができる。能登空港は、奥能登をド田舎から普通の田舎に変えてくれた。』と言っていただいています。

さて、私の構想というのは、奥能登の2市2町(輪島市、珠洲市、能登町、穴水町)が既存の枠組みとは別に、互いに知恵を出し合い一緒に観光振興に取り組んでいきましょう、ということです。

観光の主役は、言うまでもなく奥能登を訪れる旅行者ですが、受入れ側である奥能登の各市町の観光課や観光協会では、他の市町に関する問合せには責任をもって答えられない、という実態があるようですので、何らかの工夫・改善が必要です。

また、大手の旅行会社に旅行商品の造成・販売を働きかける場合でも、市町毎に働きかけるよりは、奥能登広域で一つにまとまって働きかける方が、聞く側の旅行会社の担当者の関心度は高くなり、魅力ある旅行商品の造成につながりやすくなります。

更に、奥能登2市2町を「食」の観点から眺めますと、高品質な日本酒、ワイン、ビール、焼酎の4種類のお酒が一つの地域の中で製造されていることは極めて珍しいことであります。

また、食材においても能登牛、蟹、フグ、ブリ、アンコウ、牡蠣、イサザなどの魚介、多様な海藻や岩のり、能登野菜やキノコ類、フキノトウなどの山菜、漬物・粕漬け・いしる・いしりなどの発酵食品、と多種多様なものが奥能登にはあり、これらも大きな魅力であります。

奥能登2市2町が胸襟を開き腹を据えて連合し、これらの豊かな食に歴史や伝統、風土、景観、人情味ある気質などを魅力発信・活用できれば、観光客が閑散となる冬季間も含め、通年的な観光誘客の底上げにつながっていくものと考えます。

更に、人は各々様々な見方をします。ある旅行通の方が奥能登を巡って言うには『奥能登は、実に豊かなところですね。また、珠洲ビーチホテル界隈は、フランスの田舎の雰囲気があり、諸施設もしっかり整備されているので、のんびりしながらリハビリで機能回復を図る滞在型旅行が似合い、国内旅行でありながらも沖縄旅行のようなプチ海外旅行感が得られるエリアだと思います。』ということで、私の娘がフランスに嫁いでいるので、何となく納得した次第です。

どのような取組が功を奏するのか分かりませんが、奥能登広域で連合・合力して各市町の魅力や季節毎の魅力を総合的に把握・発信し、企画・受入れもできれば、奥能登への観光客増に加え、奥能登旅行の満足度の向上、リピーター・口コミの増加に繋がっていく可能性があるというのが、ある事件がきっかけとなり、以来、三十数年間、能登に関心を持ちながら眺めてきた私の思いであります。

こらむ　アイデンティティ 38

「ふるさと」とは…〈その5〉
3300年前縄文人が火起こし
―能登の遺跡から「火きり臼」―

右のタイトル見出しで、本年(平成30年)2月24日の読売新聞で掲載された。この〈こらむ〉で以前取り上げた「真脇遺跡」で、縄文時代後期から晩期に使われたとみられる火起こし道具「火きり臼」の木片が国内2例目として、放射性炭素測定によって発見された。

「火きり臼」は木製の棒を臼に垂直に押しつけながら回転させ、摩擦熱で火を起こす仕掛けである。出土した「火きり臼」の木片は、スギの木で長さ約40㎝、最大幅約6㎝、厚さ約2㎝のもので中央近くに火を起こした跡とみられる直径1.5㎝の炭化した丸いくぼみがある。

われわれ奥能登の先人達は日頃の暮らしの工夫はもとより、長い厳しい雪の冬を生き抜く知恵を凝らし、逞しく生きてきたのである。奥能登人は粘り強いとよく耳にする。「火きり臼」に象徴される遺伝子を受け継いでいるからであろうか。

先年、この真脇遺跡を訪ねて見たのは、巨大な柱痕の復元であった。栗の木を二つに割り弧の部分を内側にして十本の柱痕が、ウッドサークルというべき円形に並べられている。南側に門のように半円状の柱が建てられている。腐らない栗の木とはいえ多分周期的に立て替えられたに違いない。そして、この円形の内底から累々たるイルカの骨が出てきたのである。サークルの中で何か天と通ずる神事を行う宗教的な遺物のように思わる。

この縄文時代の奥能登の遺跡から視点を広げると、伊勢神宮における二十年ごとの式年遷宮の「心の御柱」奉献や、信州の諏訪大社の寅年と申年の七年ごとに行う式年造営「御柱」の神事につながる原型として想像は膨らむのである。

(押上武文〈府中市　宝立町出身〉)

美しい能登 挿絵画家 西のぼる氏

世界農業遺産を描く（その1）

2011（平成23）年6月能登半島の古くからの営みが伝わる能登の里山里海が世界農業遺産に認定されました。歴史小説の装画で著名な珠洲市出身の西のぼる氏は、能登半島の美しい風景と共に豊かな里海里山で生きる人々の悠久の営みを優美で繊細な筆致で描き上げています。

◆ツバキ咲く里山とトキ

天空に悠々と羽ばたく鳥は朱鷺、「ニッポニア・ニッポン」と呼ばれる日本の特別天然記念物として自然の多様性の大切さ、大自然と融合して生きる奥能登のシンボルである。

奥能登の厳しい冬にじっと耐え、その強い生命力と強靭さで能登に生きる人々の暮らしを見つめている「藪椿」、深い緑色の葉に対比して咲き誇る紅色の花は凛として美しい。椿は漢字では木偏に春と書き、春の訪れを告げる花木でもある。

厳しい冬季の北風に耐え、深紅の花が一斉に咲き誇るとき、人々は農作業に向かう。

◆半島の先へ　禄剛崎灯台

日本海に突き出した能登半島、その最先端に建つ白亜の灯台が今も航行の安全を見守っている禄剛崎灯台である。

水平線から昇る朝日と、水平線に沈む夕日を同じ場所から見ることができるスポットとして人気が高い。

古代の文化は日本海を渡って日本に入って来た。灯台に立てられている標示板は、上海（中国）、釜山（韓国）、ウラジオストック（ロシア）と対岸の国々を身近に感じさせる。

鑑賞文　すず椿協会監事　田中栄俊

【略歴】

- ●昭和21（1946）年
  珠洲市生まれ
  挿絵家を目指す兄の影響から画家を志す。
- ●昭和40年　飯田高校卒（17回生）
  就職先の赴任地・小松市で作家・森山啓氏と知遇を得てサラリーマン生活の傍ら新聞小説の挿絵などを描く。
- ●昭和54（1979）年
  「小説現代」で挿絵画家デビュー
  繊細で明るい独特の画風で、時代・歴史小説を中心に多数の人気作家らの装画、挿絵を手掛ける。
- ●平成5（1993）年
  第2回日本文芸家クラブ大賞・美術部門賞
- ●平成9（1997）年
  珠洲市文化功労賞
- ●平成13（2001）年
  第32回講談社出版文化賞・さし絵賞
- ●平成22（2010）年
  中日文化賞、石川県文化功労賞
- ●平成27（2015）年
  紺綬褒章受章
  「等伯」安部龍太郎、「岳飛伝」北方謙三作品に挿絵、北陸中日新聞にエッセイ「画中日記」を連載
- ●著書「さし絵の周辺」海越出版社
  共著「能登の海道」、「加賀の細道」など多数

〈白山市在住〉

〝空海伝説の里〟宝立

平安時代初期の僧空海（774－835）は真言宗の創始者である。弘法大師は没後醍醐天皇から賜ったおくりなである。遣唐使として唐に渡り帰国後、高野山を拠点に全国各地を行脚したと伝えられており、珠洲には佐渡から船で渡って来たと言われている。名勝見附島は「空海が最初に見つけた島なので見附島と名付けられた」と言われていることは誰でも知る伝承である。同町の法住寺は空海が開祖であり、空海の修業の地、例えば川の上流一帯で般若経を唱えたことから盤若川の名の由来だと称されており、布教の足跡を辿るように宝立町には幾つもの空海伝説が点在している。

昨年宝立町の高橋昭市氏ら有志がこれらの伝説を冊子「空海伝説の里宝立」にまとめた。今年4月14日（土）伝説の地を巡る「空海ウォーキング」を開催する。ふるさとの歴史を探索しながら歩きませんか。

特別寄稿

能登と九州を結ぶ平家物語

作家　櫻田　啓

5年前、拙著『殺意の赤い実』（PHP研究所）を執筆するにあたり、初めて奥能登に取材旅行に出かけた。

須須神社の宮司さんはじめ、珠洲市役所の方や地元の「平家の郷構想推進協議会」の皆様、郷土史家、写真家の方々から熱烈歓迎をうけ、奥能登観光も楽しんだ。

爾来、珠洲市の方々とは交流はあるものの、まだ能登への再訪はしていない。紙上をお借りしてご無沙汰をお詫び申し上げたい。

この小説は、九州にある「平家山」で起こった登山客の死亡事件を契機に、珠洲市出身の被害者を九州出身の若い刑事が捜査する中で、平家伝説のミステリーに巻き込まれるという物語である。取材中、能登の平家の郷との奇妙な因縁に鳥肌の立つ思いを経験した。

実は、私が生まれた集落は、大分県の「平家山」の麓であり、平家伝説の残る集落だった。そのため、『奥能登平家の郷構想推進協議会』の大兼政氏、重政氏とは「お互い平家の末裔同士、将来、平家の郷として交流ができればいいですね」などと語り合ったが、互いに多忙な身、その交流構想もなかなか実現できずにいた。

ところが、私が顧問をしている故郷の「平家の里」の杉林の中で昨年、忽然とミツマタの群生が発見された。その規模は、九州一とも日本一とも言われるほどである。

高齢化や過疎のため、それまで平家の里の活動に腰が重かった集落の人たちは「平家の里」と「日本一のミツマタ群生地」を合体させ、町も乗り出して、限界集落のための観光目玉にしようと立ち上がった。

今年初めて鑑賞会を開いたところ、毎日百人以上の観光客が押し寄せるようになったとか。なぜ？　突然にミツマタの群生地？

地元の人たちも首をかしげるが、杉林の伐採がすすみ、陽の光が差し込むようになったのが原因という。しかし、私はそうは思わない。おそらく、平家の落人たちはミツマタを植え、育て、紙を漉いて都を偲んでいたのではないか。

杉の植林によってミツマタの根は地中に眠り続け、800年の時を経て目を出し、花を咲かせた。まさに遠い歴史のロマンが蘇ったのだと思う。

これをきっかけに「九州の平家の里」と「能登の平家の郷」の交流が動き出せば、地域振興のヒントが見えてくるかもしれない。

奥能登の皆さん、どうぞよろしくお願いします。

［櫻田　啓］

昭和22（1947）年　大分県生まれ
警視庁、出版社編集部を経て童門冬二門下生として時代・歴史小説の執筆に入る「大友宗麟の生涯」「初代金沢城主・鬼玄蕃と虎姫」「広瀬武夫」「杉原千畝」など作品多数。大分県竹田特命大使

飯田高校同窓会東京支部総会の開催

飯田高校同窓会東京支部の平成30年度総会が開催されます。役員一同先ごろ改訂出版された「同窓会名簿」を手掛かりにこれまで以上の参加者を募り盛況に行いたいと張り切っています。

○日時／5月26日（土）12：30－総会　13：30―懇親会
○場所／文京区湯島1－7－5　東京ガーデンパレス
最寄駅　JRお茶ノ水駅、地下鉄新お茶ノ水駅　5分
○会費／1万円
記念講演：珠洲焼について（仮題）
珠洲焼陶芸家　篠原　敬氏（昭54卒・31回生）
アトラクション　バイオリン・アントニオさん
物産展　能登すずなり

お問合せ先／鹿肝幹事長　電話・FAX04－2993－7567
携帯090－1849－4148

ふるさと行事のご案内

4月10日（火）～17日（火）	加賀百万石展と富山・福井の味と技	東武宇都宮百貨店
4月12日（木）～18日（水）	北陸新幹線　うまいものめぐり（仮称）	そごう千葉店
4月14日（土）～15日（日）	石川県人会郷土訪問旅行（穴水・七尾）	キャッスル真名井
4月19日（木）～24日（火）	加賀百万石の物産展	水戸京成百貨店
4月25日（水）～5月1日（火）	味覚の加賀・能登・金沢フェア	高島屋港南台店
5月10日（木）～16日（水）	加賀・能登・金沢　特選会	横浜・京急百貨店
5月23日（水）15：00～	石川県人会キリンビール工場見学	キリンビール横浜工場
6月1日（金）～2日（土）	石川県人会里帰り・金沢百万石祭り	金沢グランドホテル
7月1日（日）　17：00～	氷室まんじゅうを楽しむ会	（未定）

頑張る奥能登人

珠洲焼 陶芸家
篠原 敬さん
（珠洲市若山町）

創炎会の活動趣旨

途絶えた珠洲焼を復興して早くも40年近くが立とうとしています。復興の際の強い思い、時代の変化に則した技術と流行、そうしたものを受け継ぎ、発展させ、そして後進に伝えることが現在の珠洲焼に携わる陶工の責務と考えています。私ども珠洲焼創炎会では、陶工各々の技術の切磋琢磨と情報交換、後継者育成を睨んだ販路開拓や周知・商談の為の展示会への参加など多岐に渡る活動を行っています。

◆メッセージ・・・・・・・・

珠洲から世界を俯瞰する、奥能登国際芸術祭はそんな希望と可能性を示してくれました。

昨年の奥能登国際芸術祭展示作品

［プロフィール］

1960　珠洲市生まれ
1979　飯田高校卒
1983　大谷大学文学部卒
1989　土と出遇う
1995　游戯窯を築窯
2000　松屋銀座にて個展
　　（2003年以降隔年開催）
2003　日本橋三越本店にて個展
　　（以後毎年開催）
他、東京、名古屋、大阪、金沢の百貨店やギャラリーにて定期的に個展を開催
2012　石川県伝統工芸士に認定
2015　珠洲焼創炎会会長に就任
　　（現在２期目）
現在
奥能登国際芸術祭実行委員
珠洲市地域振興策検討会委員
珠洲焼資料館専門委員
珠洲フラウエンコール指揮者

風薫る五月、奥能登の催し

5月2日(水)3日(木)
能登町小木港・とも旗祭り

5月3日(木)4日(金)
第34回 大谷川・鯉のぼりフェスティバル

7月6日(金)7日(土)
能登町 能登町あばれ祭り
夏の「能登博」の幕開き

4月下旬～5月中旬
奥能登円のとキリシマつつじオープンガーデン
燃える深紅の能登の天花

事務局から

この冬帰省した折り、中本利光氏の「奥能登連合観隊構想」の新聞記事が目に止まりました。奥能登２市２町で観光誘客を競うのもいいが、首都圏から見ると一帯としてしか見えない奥能登は、より工夫した観光戦略が必要ではないかと思うのです。例えば、キリコ祭りの開催日は地元の宿泊地は満杯になり、宿泊出来なくて旅行を断念してしまいます。それを受け入れる近隣市町が見物送迎バスを相互に仕立てるなど市町の境界を取り払い連携できないかと思うところです。強力な「連合観隊」の“進撃”を期待いたします。

〔東京奥能登応援団〕　代表／光眞　章　副代表／下平　康次